

長期研修に参加して

附属図書館情報管理課電子情報掛長 磯谷峰夫

例年よりも暑く感じられた今年の7月、三週間の日程で行われる大学図書館職員長期研修に参加しました。来年以降参加する人の参考になるよう、その様子を報告をします。

この研修は文部省と図書館情報大学の共催で、「中堅職員に対し、学術情報に関する最新の知識を教授し、職員の資質と能力の向上を図る」ことを目的に毎年行われています。今年も全国の大学図書館から38人が受講し、公立大学や私立大学からも若干参加がありました。

日程や各講義の要綱は、

<http://www.ulis.ac.jp/library/Choken/2000/> にあります。このページの内容は研修中に知ったのですが、常設されており内容の一部は開催前にアップされているようなので、事前に眺めることができます。またここには、過去の研修要綱も置いてあります。

内容は講義、共同討議、施設見学の三つに分かれ、時間比にすると5:1:1ぐらいで、講義受講が研修の中心です。講義の種類には(1) 大学図書館行政や運営等の総論、(2) 電子図書館に関する話題、(3) 共同保存図書館や国際ILLなど相互協力、(4) 多言語対応目録等の国立情報学研究所の活動、(5) 情報リテラシー教育や図書館ボランティアといった事例紹介、(6) その他電子出版の動向や著作権等の周縁トピック、などがあります。主催者側によると、講義内容は最新の技術動向を踏まえ、前年開催時のアンケート結果も反映し(講義1コマごとにアンケートを提出することになっています)毎年吟味したものになっているとのことでしたが、確かによく練られていると感じました。特に個人的には10年ぶりに図書館らしい仕事に戻ったところだったので、そのギャップを埋めるのに有効でした。ただ難を言うならば、総論は内容が似かよっており、それに比してコマ数が

多すぎる感じでした。三週間職場を離れ、隔離された環境に置かれることは、様々な話題を客観化、抽象化して考えられる状態にさせてくれます。総論が続くよりも、広い範囲にわたった具体的な話を増やして、全体の構成にもっと話題の振幅を持たせてもいいのではという印象を持ちました。

共同討議というのは、ひとつのテーマについて7~8人で話し合うというこの種の研修の定番で、事前に希望討議題のアンケートをとり、その結果に基づいてグループ分け、討議題が決まります。話し合いといっても時間も限られていて、結論を出すというよりも参加者各自の置かれた状況を相互理解するのが目的と考えて臨んだほうがいいと思います。

施設見学は、国立国会図書館やいくつかの大学図書館等へ行き、そこで事業概要について説明を受け、見学するものです。ここでも通り一遍の概要紹介よりも、各機関の個性に特化した説明が印象に残りました。

三週間のうち、最初の一週間はつくば市で、残り二週間は東京が会場であり、かつては合宿的性格が強かったらしいのですが、首都圏居住の参加者は毎日通ってこられたり、自分で宿泊先を確保される方もいて、そういった色合いはあまり感じられませんでした。この点は以前とは様変わりしているのかもしれませんが、また、今も昔も変わらない点だと思うのですが、この研修は、三週間のツアーコンダクター役とも言うべき図書館情報大学職員の方々の平日休日、朝晩を問わない献身にささえられています。来年以降参加する人へ最も伝えなくてはならないことは、これらの皆さんの負担にならないようになさいということです。

(いそや みねお)